

# 後拾遺集「名所歌」小考

実川恵子

歌枕とは、古来和歌に詠まれた土地や地名を指し、古今集に至って、地名がある固有の情緒的イメージと結びつくという変化や進化を辿っていく。その型も凡そ次のような分類がなされる。一つは、特定の景物との結びつきで詠出されるという伝統的パターン、次に古歌を背負うことによって人事的な意味合いを含ませるもの、また掛詞や序詞の用法によりその地名の名辭的なおもしろさを表現しようとしたものなどである。

このように歌枕によって様々な文芸的世界への取り組みが試みられてから、約百年後の十一世紀の初めに清少納言の「枕草子」が出現する。この枕草子の中に、「山は」、「市は」、「淵は」といったいわゆる地名類聚章段がある。これらに表現されたことは、歌枕との関連を抜きにしては考えられないだろう。例えば、この類聚段に取り掲げられた地名や歌枕は、古今集や歌字書である「古今和歌六帖」、そして万葉集の歌などに詠まれたものを列挙するのである。

つまり、和歌文学を基盤に置きながら、単なる歌枕や地名の羅列で終ることはない。そこには清少納言独自の文学的才能の躍動をも感じさせ、大変興味深いものがある。

「山は」段（十三段、以下本文と段数は岩波文庫本所収の三巻本に拠る）には小倉山、鹿背山、三笠山、このくれ山など十八の山々を掲げ、そのうちの四つの山（かたさり山、朝倉山、おほひれ山、三輪山）について清少納言は次のような感想を付加している。

かたさり山こそ、いかならんとをかしけれ。

朝倉山、よそに見るぞをかしき。

おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などのおもひ出でらるなるべし。

これらを手がかりにして、どうして清少納言はこの山々を挙げたのだろうかを考えてみたい。最初の「かたさり山」は、「かたさる」（遠慮する）山とは、どんな山かとおもしろい、とその山の名称への興味を語り、次の朝倉山では「昔見し人をば我はよそに見し朝倉山の雲居はるか」（夫木和歌集）の古歌の連想がなされている。また、「おほひれ山」という名称から石清水の臨時の祭の舞人の姿が思いおこされるのであろう。

このように、「山は」段では実際の山々の景を想い浮かべて詠んでいるのではなく、むしろ列挙された山々の名辭によって連想され

ていく人事の世界に興味を馳せている。

さらに、「淵は」(十七段)では、次のような淵を掲げている。

淵は かしこ淵は、いかなる底の心をみて、さる名を付けけんとをかし。ないうりその淵、たれにいかなる人のをしへけむ。

青色の淵こそをかしけれ。蔵人などの具にしつべくて。かくれ

淵。いな淵。

ここに掲げられた五つの淵は、いずれも「五代集歌枕」などの歌学書には見えず、淵そのものの恐るべき所という性格を表示して、「かしこ」、「な入りそ」、「青色」、「隠れ」、「いな(否)」という擬人的な名称から連想される文学的世界が描かれる。

このように地名類聚段の読みを通して理會される歌枕の世界は、当時の歌枕や名寄類にも重出し、平安朝の和歌文学が基盤となったことはもちろんだが、清少納言の創り出した歌枕の名辞的なおもしろさをねらった機知の世界にはかならない。さらに目新しい地名の列挙は、独創的歌枕の創造であり、こうした革新的な試みは、これより後の和歌文学に少なからず影響を与えたに違ひなからう。そうした視点から、枕草子の地名と平安朝和歌、特に枕草子成立以後の勅撰集である後拾遺集における地名歌とどのような係わり合いが生じたのかを考察して見ることにしたい。

後拾遺集卷十八「雑四」(川村晃生校注「後拾遺和歌集」和泉古典叢書5に拠る)の五十八首(1041~1088)の歌を、その内容から分類すると、松十、深山二、名所二十三、物詣八、歌集六、その他十首となる。この「雑四」という巻全体は、悠久の歴史を主題にした詠歌が多数見られ、変化の様相を叙述する対象として地名を読むとい

う、このことと符号してか、約半数の歌に地名が詠み込まれている。今回はこの「雑四」巻の二十三首の名所歌群を中心に、どのような視点から地名を詠んでいったのかを考察したいと思う。

まず、「雑四」の中程に位置する名所歌群に詠出されている地名と作者を順に掲出すると、次のとおりである。

勝間田の池(範永)・須磨の浦(経衡)・龍門の滝<sup>2</sup>(定頼)・弁乳母)・大覚寺の滝(赤染衛門)・法輪寺(道濟)・桂の宿(輔親)・束間湯(重之)・住吉4(後三條院、経信、棟仲、上東門院新宰相)・住吉の浦<sup>2</sup>(兼経、頼実)・住吉の江(為長)・住吉神社<sup>2</sup>(増基法師、赤染衛門)・富緒川(弁乳母)・長柄橋3(公任、赤染衛門、伊勢大輔)・錦の浦(道命法師)

\*は後拾遺集独自の地名

これらの地名を、先行勅撰集の古今集や拾遺集の名所歌と比較すると、後拾遺初出の地名が三割をも占める。後拾遺時代には膨大な歌枕を継承し、更にそのうえに新たな歌枕を創出するに至りこの時代の生み出した一つのエネルギーを感じさせる。このような地名歌の増大は、後拾遺歌風の特徴の一つに掲げられ、それは雑部のみならず、羈旅歌や四季、恋部にも見られる。そうした現象は、歌枕という一つの個別的なイメージによる連想世界が、実際に現地に行かなくても和歌によって感受することができるという伝統的な用法からしだいに変化していくのである。それは、受領層歌人や女房達、そしてこの歌人達と接触しながら活躍する能因法師や増基法師を代表とする僧侶歌人の出現によって、伝統的な和歌世界での歌枕が、想像上のものでなくなり、文学的世界で定着したことを実感していることとする姿勢が出て来ることや、また更に新たな歌枕を創出す

ることにもなる。このような現象は、平安和歌史上、革新的な意味を持ち王朝空間の拡大につながる部分として大いに注目したいところでもある。

それでは、先述した二十三首の名所歌のうち注目される様相のいくつかについて検討してみよう。冒頭から池、浦、滝、河、湯の水歌群が並んでいる。

まず、その冒頭歌は、受領層歌人の象徴的な存在として、また和歌六人党筆頭の当代歌人の範永詠、

関白前大まうちぎみの家にて、かつまたの池を読み侍りけるに、  
とりもめでいくよへぬらんかつまたの池にはいひの跡もだになし  
である。この歌は、勝間田の池の変貌を詠じた歌であり、勝間田の池の地名を詠じた例は、万葉集卷十六の「勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が髭なき如し」とあるのが最も古い例である。また、この勝間田の池は、「枕草子」の「池は」(三十六段)の冒頭に掲げられる。この地名の地理的位置については諸説あり、「枕草子」の地名章段の記載順序にどのような基準が存するのかわ不明だが、この勝間田の池の次に磐余の池が掲げられ、これが大和に位置するところから、同じ大和に存する地名と考えてもよいかもしれない。いずれにしても、先行勅撰集には取り上げられなかった新しい地名であり、この勝間田という地名が取り上げられた理由として、「且又」という意味あいを含めた名称への興味という視点でとり掲げられたものかも知れない。また後拾遺集に新風を送り込んだ範永歌という点でも注意を引く。

続いて、これも和歌六人党歌人の一人、経衡の、

須磨の浦を読み侍ける

立ち昇る藻塩の煙たえねば空にもしるき須磨の浦かな  
という詠歌である。この歌は、古今集、雑下、在原行平詠の「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつわぶと答えよ」のように、以来、須磨と藻塩の煙は切っても切れないものとなっている。

しかし、本歌は立ち上る藻塩の煙の空を眺めただけで須磨の浦の所在がわかるといった理詰めの詠み口となっている。

次は、四首の滝歌群が配される。まず、瀧門の滝を詠じた次の二首(定頼、弁乳母)を掲げる。

瀧門の滝にて

くる人もなきおく山の滝の糸は水のわくにぞまかせたりける

やよひの月、りう門にまゐりて滝のもとにて、かの国の守義忠

が桃の花の侍りけるをいかがみるといひ侍りければ読める

ものいはばとふべきものを桃の花いくよかへたる滝の白糸

瀧門の滝詠は、既に古今集の伊勢歌「裁ち縫はぬきぬ着し人もなきものをなに山姫の布さらすらん」(雑上・88)に詠まれており、落下する滝を布に見立て、その上に更に瀧門山の伝説を踏まえた神秘的な詠歌である。これに対して後拾遺集の瀧門滝の歌は、掛詞や縁語を用いてその悠久の歴史を詠じている。

これに続く滝は、赤染衛門の大覚寺の滝詠、

あせにける今だにかかり滝つ瀬のはやくぞ人は見るべかりける  
である。大覚寺の滝は、公任に拠って、「滝の糸は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ」(拾遺・雑上)と詠じられ、

既にこの時点で滝の流れは絶えていたことが解かるが、この赤染衛門歌では、細々ながらも滝が流れていたことを語っている。

滝歌群の後には、次の源道濟歌、

滝歌群の後には、次の源道濟歌、

法輪にまゐりてよみ侍りける

年ごとにせくとはずれど大堰川むかしのなこそなほながれけれど、詞書の「法輪」とは、渡月橋の南に位置する法輪寺のことで、この寺が古典文学に掲げられることは稀だが、枕草子「寺は」段にはこの法輪寺を取り掲げている。この法輪寺が和歌に詠まれたのは、勅撰集では後拾遺集が最初であり、本歌以外にも法円法師の「法輪に、道命法師の侍りけるとぶらひまかり渡るに、呼子鳥のなき侍りければよめる 我ひとりきく物ならば呼子鳥ふた声まではなかせざらまし」(春下・廻)もある。この歌などから、道命法師が法輪寺を一時の住いとしていたことも推測されるようである。

このように、法輪という新たな地名を織り込みながら、由緒ある大堰川を讚美しており、紅葉の名所という観点で詠じた伝統的な手法(「色々の木の葉流るる大堰川しもは桂の紅葉とや見む」(拾遺・忠岑)とは異なった詠風を感じさせる。

続いて、長文の詞書を有する輔親の、

さきの日に桂の宿を見しゆゑはけふ月の輪にくべきなりけり  
という歌が並んでいる。この歌は、詞書記述から、「かつら」と「月の輪」は、「月の桂」という有名な中国の伝説を踏まえ、その名辭的興味から詠出されたものであろう。経信は、『難後拾遺』の中で、本歌に対して、輔親自身の弁を引用し、後拾遺集の詞書記述の不十分さを非難している。

次の歌は、信濃の名湯「東間(筑摩)の湯」の賑いを次のように読んでいます。

修理大夫惟正、信濃守に侍りける時、伴にまかり下りて、つかまの湯を見侍りて、

いづる湯のわくにかかれる白糸はくる人たえぬものにぞありける

この東間の湯は、古くは「日本書記」に見い出されるが、以後の和歌には検索されず、後拾遺期の新たな歌枕の創出であると考えたい。また、本歌の詠者重之は、陸奥と深い関わりを持ったことから多くの地方詠を生み出し、後拾遺時代の歌枕創出者としての役割を荷った歌人でもあった。そして、この重之を先駆者として、後拾遺集の代表的歌人の能因法師や相模らに引き継がれていったようである。

名所歌の後半部は、「すみのえ」、「すみよし」の地名を詠んだ住吉神社参詣歌群九首が配列されている。「すみのえ(墨江)」と「すみよし(住吉)」は古来から多くの歌に詠まれており、両者の区別等については諸説があるが、この名所歌では、住吉の松二、住吉の岸二、住吉の神、住吉の浦、墨江、墨江の神一首が詠じられている。これらはその関連する「浪」、「松」、「忘れ草」の景物と共に読まれる伝統的用法に拠る歌が多い。そのような中に、次の経信の後三條院住吉御幸の折の歌、

おきつ風ふきにけらしな住吉の松のしづえをあらふ白波

は、素性法師の「住の江の松を秋風吹くからに声うちそふる沖つ白波」(古今、賀)を典拠とするものだろうが、聴覚的な効果をねらった古今歌に対して、当歌は視覚に転じており、その清新な叙景歌は注目されよう。

この住吉参詣歌群に続いて、弁乳母詠の

天王寺にまゐりてかめぬにてよみ侍ける

よろづよをすめる亀井の水はさは富の小川のながれるらん

は、詞書と歌に詠まれた地名(四天王寺、亀井、富緒川)の一つの連想を歌にしたためたもので、背後に聖徳太子の天王寺創建の故実

が含まれている。新奇な発想の一首である。

古今歌にも多数読まれている「長柄の橋」詠が三首（公任、赤染衛門、伊勢大輔）続いている。この長柄の橋は、「古いもの」、「壊れたもの」の喩えに用いられ、赤染衛門の、

わればかり長柄の橋は朽ちにけり難波のことも古るる悲しき

は、私と同じように長柄橋は朽ちてしまったと、比喩を逆点したところがおもしろい趣向である。

名所歌の最終歌は、

錦の浦といふところにて

名にたかき錦の浦をきて見ればかづかぬあまはすくなかりけり

は道命法師の歌で、「錦の浦」という地名はこの例の他は見当たらず、新たな歌枕の出現と見て良いと思われ、この「錦の浦」という地名に感興を持ち、「来て」「着て」、「被く」「潜く」の掛詞を用いた手法は、新鮮な印象を与えている。

以上のように、大変雑駁であるが、後拾遺集「雑四」の名所歌を中心に、その地名がどのような意図で、またどのような視点から詠出されたかを考察してみた。後拾遺歌風の一特質として掲げられる地名歌の増大という現象は、単に政治的な問題のみならず、大きな文学的問題を有しているものと思われる。

地名歌の増大や新たな歌枕の創出によって後拾遺集の和歌的空間は大いに拡大された。それは受領層歌人の出現や能因法師らによって、地方と都の交通が盛んになり、地方の風物な土地に対する関心も高まって来ることは当然のことである。しかし、後拾遺集の名所歌は単なる関心に留らず、そこに詠まれている伝統的な比喩や修辭法をこえて、新たに創造された歌枕から連想される名辭的なおもしろ

ろさを伝える多くの歌が具現することにもなった。このような趣向は、歌の斬新さにもつながっているとと思われる。古来、地名歌が有していた伝統的なその土地固有のイメージと余情を表現する役割のみではなく、本来、和歌のことはから連想された一つの機知的な雰囲気や伝える手段として、その効果を持つてくるのではなからうか。このような詠風が、ここで取り掲げた「雑四」巻の歌々にあらわれていると思われる。つまり、後拾遺集の「雑四」巻は、「枕草子」の類聚段の名辭的な連想による歌枕の創造の部分と文学的共通性を認めることが出来、またこのような点が、誹諧歌と言う機知的世界の創造という、和歌界における革新的な世界を生み出す一つの要因となったのではなからうか。

藤原俊成は「古来風体抄」の中で、後拾遺集の歌風について「ひとえにをかしき風体」と評しており、「をかしき」部分とは、前述してきたような名辭的興味による文学的連想によるものという捉え方も可能なのではないだろうか。

注1 百目鬼恭三郎氏「後拾遺時代における歌枕の創出」（共立女子短大文科紀要）29号、昭61）

注2 斎藤照子氏「赤染衛門集再考——法輪寺詠をめぐって」（『和洋国文研究』昭54・12）

注3 天武十四年十月「輕部朝臣足瀨・高田首新家荒田尾連麻呂を信濃に遣して行宮を造らしむ。蓋、東間湯に幸さむと擬ほすか」とある。

注4 奥村恒哉氏『歌枕』（平凡社選書52）、片桐洋一編『歌枕歌ことば辞典』等。